

## ニュージーランドにおけるファームステイを体験して

厚生連 大浦 栄次

昨年（昭和59年）9月10日～14日まで、第9回国際農村医学会がニュージーランド（以下NZ）の南島、クライストチャーチで開催された。以前から同国の農業に関心を持ち、高校時代よりNZの農村の女の子と文通をし、一度は訪れてみたいと思っていた私は、「NZなんて見るところもないのに」と渋る妻を説き伏せ、この初めての海外旅行に臨んだ。

ところで、パック化された旅行は手軽であり、かつ有名観光を能率的に消化するには、現代日本の「あくせく人間」にとって大変便利ではある。しかし、旅の醍醐味は何と言っても旅先での見知らぬ人との出会いであり、その土地の人情に直接触れることであろう。それには、団体旅行のみではどうしても限界がある。

出発前、NZの旅行案内書にファームステイ（farm stay：農場滞在：実際に農家に寝泊りし、同国の農業に肌で触れる機会を与える制度）が紹介してあった。これだ、とばかり旅行社に申込んだ。同じ学会参加者の城端厚生病院長の寺中先生も「ワシも連れていけ」ということで、二泊三日のファームステイを二人で体験することになった。

### 1. Page家のこと

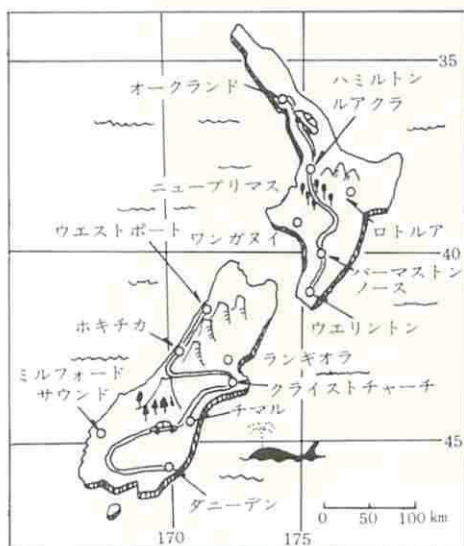
#### 空からのニュージーランド

北島のオークランドに飛行機が着くと、ここからがNZである。飛行場のすぐ横に牛たちのがんびりと草を食む。牧場の柵があたかも飛行場の囲いと思わせるほど、見渡す限り

牧草の絨毯が続く。

このオークランドから乗り継ぎで、さらに南島のクライストチャーチ空港に向かう。機窓から見るNZは、緑また緑であり「牧畜の国ニュージーランド」との謳い文句を実感として感じる。

それにしても何と家の少ないこと。さらに一軒一軒が、砺波平野の散居村に住む私でも信じられないほど離れている。人口わずか300万人。富山県の約3倍の人達が本州と九州を合わせたほどの土地に散らばり、さらにその80%以上の方が都市に集中しているとあらばさもありなん。「ところで、今日ファームステイする農家もポツンと離れた寂しい一軒家だろうか」空からNZを眺めながら少々不安を覚える。



## 「a」の発音

クライストチャーチ空港に出迎えてくれたのは、ファームスティ先の奥さん、Mrs. Pageであった。彼女は適度に太り、見るからに人の良さそうな「おふくろさん」と言った感である。彼女の車（ニッサン・サニー）に乗り約30分、Page家に着く。

ところで、このPageという語であるが、ペインではなくパイジと発音する。つまり、<sup>ai</sup>を<sup>a</sup>と発音する。だからSundayはサンダイ、some daysはサムダイズ、holidayはホリダイ、sameはサイム、eightyはアイティのごとくである。最初は私だけでなく、英語堪能なる寺中先生までが面喰ってしまわれた。後日、北島の南端、NZの主都ウエリントンでも、この人達ほどではないがこの発音が耳についた。ただし、さらに北のロトルア、オークランドではほとんど気にならなかった。NZの方言の一種なのだろう。ただし、北島で出会った日本人通訳の人達に言わせると、慣れるとほとんど差を感じないそうである。

## 春の訪れ

赤道を越えたNZの9月は、日本の春である。クライストチャーチ、別名ガーデンシティ(Garden City)の桜は一面満開であった。

Page家は南島5大平野の1つ、カンタベリー平野の北部 Rangiora にあり、クライストチャーチから北へ約20kmの位置にある。

ここの草花も冬の目覚めを告げている。タンポポや桜が花を開き、家の周りを流れる小川の水音は、軽やかな春のリズムである。なだらかに上下する緑の牧場の向こうに、残雪を頂く山々があり、その稜線をなぞって吹く風に冬のなごりを感じる。ここの全てをつつむ風景の色合、輝き、そして風のたたずまいが日本の春との距離を感じさせない。

家は、一部二階建て。Mr. Pageが約3/5を自分で作り、暖炉など特殊なものだけを信頼する職人にやってもらったそうである。大きさ

は、砺波地方の大きな家を見慣れている者にとっては、そう大きくは感じない。しかし、十分にスペースを取った庭々は、日本にないゆとりを感じさせる。ペランダを出るとプールがある。枯れたツタが這い、そして舞い込んだ木の葉の存在が、昨日経由してきたハワイのワイキキの浜と逆の気候にあることを知らせている。

## Page家の農場

Page家の家族は、Mr. Page 49才、Mrs. Page 49才、娘のJapue 25才の3人である。Mrs. Pageは看護婦としてクライストチャーチの病院に勤め、家ではもっぱら家事や庭の手入れをする。

農場は170ha、羊600頭、去勢牛11頭、鹿300頭、さらに大麦、小麦、ライ麦等を栽培する。Page家が住むカンタベリー平野は、NZにおいては、「ヒツジ・コムギ混合農業」地帯として分類されているが、Page家のそれもその一種であろう。この農場の管理をするのはMr. Page、Jaquie、それに通いで勤める16才の少年のわずか3人である。

農業機械は、日本でも見なれたトラクターやコンバインなどもあったが、すべからく大きい。

家には犬が5匹。うち2匹はハンテングのお供用であり、残り3匹がシーブ・ドックの親子である。Mr. Pageに「こんな広い所に散らばっている羊を集めるにはどうするのか」と尋ねたところ、温厚で親切な彼は早速シーブ・ドックのオス1頭を連れて、羊集めを見せてくれた。夕闇迫る広大な牧場に散開する羊。Mr. Pageが指令官よろしく犬に号令をかける。一瞬にして、犬の姿は牧草の緑と夕日の中に融け込む。と思う間もなく、羊の群が丘の向うから現れる。Mr. Pageの指令が次々とかわる。1匹、2匹と離れていた羊も、駆け回る犬に追いたてられ集団の中に吸収されて、ついに柵の隅に美事に集められた。

図2 シーブドックと美事に集められた羊の群



## 2. 広大な農業

### 灌 漑

Mr. Pageが案内する道のところどころに、直径1.5m ぐらゐの車輪のような物がころがっている。「何だ」と尋ねると、彼は牧草の生える1辺500mはあると思われる圃場に連れていってくれた。

直径20cmほどのアルミパイプが、先ほどの車輪に約30m間隔ごとに支えられ圃場の端から端まで連らなっている。

パイプの中央付近でガタゴトやっていたMr. Pageの方角から突然、あたりの自然のさきやきを弾き飛ばすエンジン音が聞こえた。と、何と、500mはあると思われる連結されたパイプが多数の車に支えられて、一斉に横一列になって動き出したではないか。

寺中先生と私は、ほとんど同時に「わかった」と言ったとたん、余りにもスケールの大きさに我を忘れ、興奮しつつ自分のわかったことを勝手に喋り出した。

つまり、Mr. Pageの説明によるとこうである。このパイプの端に地下水を供給するパイプを接続する。一つの子輪と一つの子輪のパイプの中央には、スプリンクラーがあり、それぞれのスプリンクラーが直径30mの範囲の牧草に散水する。散水が終ると、先ほどMr. Pageが動かしたようにパイプ全体を30m程度、一列行進にて前進させる。ここで、再び散水

する。これを順次繰り返し、圃場全体に灌漑するという訳である。そして、あのけたたましいエンジン音は、パイプ全体を引っ張る駆動部の叫び声だったのである。

日本では、とうてい考えつかない大規模な灌漑方法である。

図3 500mはある灌漑用パイプを一斉に動かすMr. Page



### 早 魘

NZの気候は、夏は暑過ぎることなく、また冬は寒さが厳しくもなく年中放牧が可能である。そして、季節にかかわらずオーストラリア方面から東にむかって、“反対旋風”が次々と押しよせてくる。この風が運ぶ雨は、南島では島を縦断し、南北に走る“南アルプス”に遮られ、東側のカンタベリー平野を充分には潤さない。ちなみに、南アルプスの西側では年平均雨量が2,500mm以上もあるが、山脈を越えた東側のPage家が住むカンタベリー平野では750mm以下である。

ところで、この地方の“水”の多くは、地下水に頼っているが、9月11日付けの当地の新聞には、「Well levels could reach record low」（井戸の水位は、これまでの最低記録に達しよう）と報じ、水不足を伝えている。

その後、10月14日付のMrs. Pageからの手紙によると事態は増々悪く、2年前の1982年の60年ぶりの大旱魘の時の半分も雨が降っていないと、その深刻さを知らせてきている。

私自身、高岡の地下水調査を行い、高岡市

農協青年部20周年記念誌「ゆたかな水を次代へ」をまとめた者として、この水問題の行方に憂慮を感じざるを得ない。

高岡の場合、地下水位の低下の主な原因は、大量の水の汲み上げによるが、NZのこのカンタベリー平野では、単なる旱魃による地下水位の低下であろうか。NZでは人口300万人に羊7,300万頭、乳牛300万頭、肉牛500万頭を飼育する。この人間より多い動物の飲み水の需要の増加が、この旱魃に拍車をかけているのではなかろうか。さらに、これらの牧場を開くために原始林をどんどん切りはらったことも水不足の遠因ではなかろうか。

ところで、1982年の旱魃の時には、北島からの干草の投入、羊の売却によりその急場をしのいでいる。つまり、羊を十分に養うだけの牧草が生育しなかったのである。そう言えば、この稿をまとめるため、今年5月にPage家に電話して家畜の数を確認したところ、鹿は9月の300頭から460頭に増えていたが、羊は600頭から500頭に減少していた。羊の減少は、旱魃による牧草の不足により、売却したのかもしれない。

いずれにしても、「水と人間」切っても切れない縁で結ばれていることを改めて認識させられた。

### 幾世代も続く牧草

牧草の生育の良否がNZ農業の死命を制する。水（雨等）の供給状態や管理のやり方一つで牧草の生育状態が左右される。その結果として、家畜の飼育頭数が決まる。

NZでは、草地の造成法、草種や品種の選択、混播、施肥法等牧草の生育、さらに牧草地における有効な放牧の仕方——家畜が多すぎると次の世代の牧草が充分生育しない、逆に少なすぎると雑草等が侵入して草地が荒れる——など世界では類を見ないほど発展させた草地農業の研究が国の機関あげて行なわれている。

Mr. Pageが案内してくれた圃場の1つで、通いで勤める少年が枯草を機械で集め火をつけて焼いていた。ライグラスかなにか禾本科植物のようである。その枯草の中に新しいクローバの葉がそこかしこに生い出している。

牧草は草種により幼苗時代の競合力が違う。クローバ類はライグラス類に比べて弱い。混播圃場では光を確保し、クローバ類の初期成育を確保してやらなければならない。枯草を集めて火をつけるなどの作業は、牧草のことを知らない我々素人にとっては無駄に見えるが、彼らにとっては重要な牧草管理技術なのであろう。最近日本において稲の刈取り後、「面倒」を理由として藁を燃やし、煙害を生じさせているのとは訳が違う。

ところで、驚くべきは牧草の世代の長さである。圃場に茂え出すクローバはすでに、7年も前に播種したそうである。そして、その世代は200年以上はもつという。実に気の長く雄大な物語である。一年一年、荒耕しをし、代掻きをし、田植えをする稲作農業と根本的にサイクルが異なる。もちろん、この牧草を何十年も維持するのは並大抵のことではない。

図4 枯草あつめも、重要な牧草管理の一つ



日本には、「百姓の来年」という俗語がある。これは「今年だめなら来年がんばって収量を上げればいいさ」といったような意味である。つまり、「今がだめでも次の機会にはなんとかなるよ」という余裕をもたせる人生教訓とし

でも使われる。ところが、NZは「百姓の来年」ではなく、「百姓の10年、いや百年」なのである。

日本人を筆頭に、稲作民族は概して「勤勉」いや「あくせく人間」と言える。稲は工業製品と比較して、一年という長い期間をかけて作る。しかし、ヨーロッパにおける三圃式農業やNZの草地農業は、稲のように1年勝負ではない。何年、何十年、いや一人の人生がようやく1サイクルとなるような農業である。この「一年人間」と「何十年人間」の相違が、日本民族とヨーロッパ系民族との根源的な思想の違いを生み出したと言うと大袈裟であろうか。

ヨーロッパにおいては「合理的精神」というのが、重要な位置を占める。日本における「百姓の来年」は、日本においては「気長」の印象を与えるが、ヨーロッパにおいては、何年、何十年が単位であり、徹底して、合理的、かつ、無駄のないようにしなければ、下手をすると一生台無しにすることになる。

Mr. Page の牧場に生い茂げる牧草が、Mr. Page とその家族にどのような思想的影響を与えているのか、興味深いことである。

#### NZ 農業の模索

NZの輸出の約60%は農産物であり、バターと羊肉は世界第1位、羊毛2位、牛肉3位である。1973年、NZの母国イギリスがEC（欧州共同体）に加盟した。それまでイギリスはNZの全世界向け輸出の25%の農産物を単独で受け取っていた。しかし、イギリスと同時にECに加盟したオランダ、アイルランドは農業国であり、共同体の一員としてイギリスはNZの農産物を無条件で買い取ることができなくなってきている。

現在NZは、農産物の輸出先をアジアを始めとする全世界に求めると同時に新しい農産物商品の開発を熱心に進めている。キウイフルーツなどはその新商品開発の典型的成功

例であり、原産地が中国であるにもかかわらず、今ではNZ特有の果実と錯覚させるほどになってきている。では、Page家の模索はどうであろうか。

牧野のすべてが羊と牛の住のようになっているNZにおいて、Page家では鹿が特異な位置を占める。この鹿の飼育がたぶん、イギリスのEC加盟による打撃を回避するための新たな挑戦であろう。ちなみに羊25ドル（≒3,150円）に対し鹿は3,500ドル（≒441,000円）であり、現在草を食む鹿460頭に単純にこの金額を掛けると約2億円以上となる。

その後、あちこちを回ったが鹿の姿はMr. Pageの農場以外では、ついぞ見ることがなかった。それ故、鹿の肥育や管理技術の確立のための苦労は、相談する者もほとんどなく言い知れぬものがあったであろう。

図5 様々な工夫をこらした鹿用の牧柵



NZの津々浦々の土地は、すべて何らかの牧柵で区切られていると言ってよい。瑞穂の国、日本のその水田に蛙が必ず巡っているのと同じである。この牧柵がいいかげんであると、蛙の水漏れと同様、家畜の脱走が始まる。が、かと言って、法外な費用をかけるわけにも

いかない。堅固で、長持ちし、かつ安価でなければならぬ。Jaqueが得意げにMr. Pageの鹿牧場の牧柵の独創性について説明してくれた。

鹿の跳躍力は、羊や牛と較べものにならないくらい優れている。通常羊は3ft.(約90cm)、牛は4ft.(約120cm)ぐらいの高さであるが、鹿用の牧柵は7ft.(約210cm)ぐらいである。それでも、飛び出すものがいて金網の上端部を破損したので、金網の上に1本別の針金を張っている。こうしておく、鹿が跳び越える際に引っかかっても、一番上の針金が切れる程度であり補修も簡単である。このなにげない工夫も、何度となく失敗を繰り返した後に思いついたものだろう。

その他、この牧柵に様々なノウ・ハウがある。金網の下は、地面からわずかに離す。さびつくからである。金網の縦横の針金はすべて直線の方が安価であるが、それでは強度が保たれない。そこで横の針金にはウェーブをかけ、金網全体に弾力を持たせてある。こうしておく、鹿がぶつかってきても、金網がクッションのようになり金網だけでなく、鹿をも傷つけないという訳である。これらの工夫に加え支柱の間隔や、牧柵の外側につくる防風林など様々な独創性が発揮されている。

単純そうに見える牧柵にしてからが、以上のごとくである。まして、最も重要な鹿の肥育とその牧草の管理技術においては、今日もNZの青い空のもと、試行錯誤を繰り返しているに違いない。そして、Page家における模索は、少なくとも成功していると思われた。

イギリスのEC加盟により、益々国際化したNZ農業。Mr. Pageのような農民がいる限りNZ農業は安泰と言える。

### 寿命の長い農業機械

日本でコンバインにしろ、トラクターにしろ、10年使ったと言えば大変長持ちしたこと

になる。意地悪な言い方をすれば、そんなボンコツでまともな仕事をしたのか、とも言える。

ところが、どっこい。農業機械の10年は、日本では、米寿、白寿の域であるが、NZでは、20才代の働き盛りのバリバリである。

Mr. Pageが見せてくれたコンバインは、日本の大きさの何倍もある。このコンバインを買ったのが何と19年前。それも、1年使われた中古品であり、日本ではとうてい信じられない長さである。そして、彼の口ぶりでは、当分買い替えるつもりはなさそうである。

ところで、19年前の購入価格が5,000ドル(今のレートに換算して約63万円)である。今これと同じのを新品で買うと80,000ドル(1,000万円)、更にいいのを買うと120,000ドル(約1,500万円)とのこと。農業機械の値上りは、彼我を越えた問題のようであるが、その次の話が我々を驚嘆させた。寺中先生が「もし、このコンバインを売ったらいくらになるか」と尋ねられたところ、彼は平然と「業者が言うには1,200ドル(約151万円)」と答えた。購入価格が約63万円であるから、その2.4倍で売れると言うのである。20年間のインフレが、価格をつり上げた訳であるが、それにしても20年も使い古した超中古品である。日本での20年物は、博物館の陳列品としての価値はあるが、通常の売り買いの対象にはならない。せいぜい廃品回収用のガラクたか、悪くすれば「処分」料を請求されても不思議でない代物である。それがNZでは立派な現役である。

コンバインだけではない。トラクターが買ってから15年であり、トラックが13年。彼が言うにはトラクターはあと15年はもつという。確かに乗せてくれた、トラクターとそのエンジン音は、我村の共同のトラクター(約10年)のそれよりはるかに快調であり、NZの大地をしっかりと耕していた。

図6 快調な15年目のトラクターが、NZを耕す



ところで、どうして日本とNZとで農業機械の寿命がこんなにも違うのだろうか。

滞在3日目の朝。すみきった空の下を散歩していると、Mr. Pageがトラックの下で何かやっている。「何をしているのか」と声をかけると、燃料タンクを修理しているという。そう言えば、昨日、コンバインを見せてくれた時Mr. Pageはベアリングやその他、あっちこちを修理したと言っていた。つまり、Mr. Pageの修理技術が農業機械の寿命を支えているのである。よく見ると、庭の小屋にはアセチレンボンベがあり、溶接もやるらしい。

図7 朝早くから故障修理に精を出すMr. Page



日本ではどうか。ちょっと故障すると、農協が「もう買い替えたらかどうか」と勧める。修理をして長く使うなどという発想が、基本的に欠如している。昨年、我村の田植えは圧巻であった。1年前まで4条植えの歩行型田

植機が主流であり、耐用年数は少なく見つっても、どの田植機も後10年はもつものばかりである。それが、1年経った昨年の田植え時には、9割の家が5条植え、6条植の搭乗型に乗り替っている。はなはだしきに至っては、田植えを始めたら機械の調子が悪いとのことで、電話1本で買いかえたとの話もある。もう寿命以前の問題である。

### 生命を生み出す農業が片手間の日本

広大な面積、大きな農業機械、そして幾世代も続く牧草と寿命の長い農業機械。さらに様々な工夫と努力を農業に注ぎ込む、Page家とNZ農業。これらの話は雄大な大河ドラマのようである。

比較して日本農業はどうであろうか。農業が人間と他の動物を分かつもっとも原緒的労働であるはずなのに、米どころと呼ばれる富山県においては、農業は完全に片手間労働にその地位を墮している。これでは、農業における様々な工夫が生まれるはずもない。明治から大正、そして昭和30年代ころまでは、農業技術の発展は、官制の農業試験場でよりも篤農家の開拓するものの中に目覚ましいものがあつた。

私の父も、様々な工夫をしていた。その中の傑作がタバコの「霜よけシャッポ」である。それまで、タバコは常に遅霜にやられていた。それを、父はワラで編んだ高さ30cmぐらいの円錐形の帽子をつくり、タバコにかぶせた。この簡単な方法で、見事霜害からタバコを守ることができた。このシャッポは、新聞でも紹介され一時は全国的にも広がった。

思うに、人間の食物生産という最も尊い行為において兼業が主流であることは、食糧自給という国家的問題とは別次元で、人間の「生」のあり方そのものに重大な影響を与えているのではなからうか。豊かな文化は、生命を生み出す行為が充分尊重される農業後背地をもつ所のみにつようように思う。

今日世界の農業の中で、主食である米やその他の農産物の生産が、片手間（兼業）的に行なわれている国を日本以外に思いつかない。日本の農業が再び真剣に行われる時代がくることを切に希望するものである。

### カルチャーショック

カルチャーショックという言葉がある。外国を旅行し、日本文化との余りの相異に衝撃を受け、甚だしき時は呆然自失する様子と言う。私の場合、このカルチャーショックはNZではなく日本に帰ってから受けた。

NZから日本へ戻ったのが9月18日。我家は稲刈りの真最中。一部バインダーで刈取った稲束を一束、一束干す。束から抜け落ちた穂を一筋一筋拾い集め、もう一度束に差し戻す。父や母に至ってはコンバインが刈取った後のワラをもう一度ひっくり返し、穂が落ちていないか確認する。わずか 1.5haの田圃である。

片や、Page 家の農場は170ha。私が住む井波町山野の専勝寺部落が30戸。平均耕作面積を1haとして、5つ以上の部落を合せた面積を1人で持つ。Mr. Page, Jaque, それに通いで勤める少年のわずか3人で管理する。

ひばりが空を飛びかい、どこまでも続く緑の稜線。その中に身も心も融け込み、人間も自然の一部であることを感じさせるNZとその農業。

一転して、我家と日本の農業。確かに、一穂、一穂を拾い上げ、生命の営みを確かめる行為は貴重であり、神聖とも言える。だが、土を舐めるがごとくあくせくと汗を流す姿は、広大な中の農業を見た直後だけに、無為を感じる。そして、はるかNZに連なる南の空を仰ぎつつ、やけに重く感じる稲束をもったまましばし「呆然自失」するのであった。これぞまさしく、カルチャーショックである。

ところで、Page 家の農場は170ha であったが、NZ全体の平均は 300ha、北島のワン

ガヌイにいるペンフレンドの農場はStation と呼ばれ、その広さ 6,000haである。富山県の耕地面積が約60,000haであるから、その約1割をただ1人のオーナーで占めていることになる。いずれにしても、その広大さに限りがない。

## 3. 自然と、人と

### ミツバチと共に生きる

ここに2枚の写真がある。1枚は、Mr. Page が見せてくれた農薬の袋、もう一方は日本のものである。それぞれの袋の文字で、まず、最初に飛び込んでくるのは、なんであろう。

図8 ニュージーランドの農薬の袋



農薬名(LINDAEN)より、毒薬(POISON)の文字が大きい。

図9 日本の農薬の袋



指で指している所に「医薬用外劇物」と小さく書かれている。

日本のものは農薬名であるダイソレートA、NZのそれは、POISONである。poison は毒薬という意味になるが、日本の袋でその文



字に該当する毒物とか、劇物という文字は小さくて、なかなか見つからない。逆に、NZの農薬の袋の農薬名のLINDANEはPOISONに比べかなり小さく書かれている。

今日、農薬を使わない農業は考えられない。しかし、それが毒物であることを認識することは重要である。この袋の表示の差異が、自然や農業に対する考え方の違いを示しているといえないだろうか。

さらに、Mr. Pageの「この国では、農薬はミツバチが活動する6時～7時の間にはけっして撒かない。ミツバチがgo home（帰宅）している時にだけ撒く。そうしないとミツバチが死ぬから」との言葉は、農業が自然との調和の上になかなか立たないとの考え方をはっきりと表明しており印象的である。

朝、出勤前にあわてて農薬を撒き散らす。農薬を撒きすぎたため、授粉を担っていたミツバチが死に、人間がハシゴをかけてミツバチになり代ってリングに授粉しているどこかの国と根本的に異なる。

朝日新聞の天声人語（4月20日付）に「3月から4月にかけて科学万博の万博道路に沢山のヒキガエルがひき殺されている」ことを述べ、カエルの救出を訴えている。カエルは、自分の生れた池や田へ、どんな障害があっても行こうとするそうで、ひかれたカエルは、突如できた万博道路で遮断された生れ故郷への、里帰り途上の出来事だという。さらに、記事は各国でのカエル救出の様子を伝え、イギリスでは、標識をたて、2万匹のカエルの移動を救ったことや、スイスでは、道路ぎわにヒキガエル捕獲用の溝を掘り、そこに落ちたカエルを毎日、人が反対の道路に移動させてやっているという。

今の日本の農家の人にこの話をして、田圃に落ちている一穂一穂を拾い上げる行為以上に、いや少なくともそれと同じほどに、ミツバチやカエルを守ることが大切だと言ってわかってくれる人間がどれほどいるだろうか。

たかが、ミツバチ、たかがカエル、と嘲笑されるのが落ちだろう。

人間が、自然界の一員であるなら、まして生き物を生み出す農民なら、他の生物との係りにもっと注意と慈愛の目を注いでもいいのではなかろうか。生態系の一部をなす我々が他の生き物を無視するなら、必ず重大な「しっぺ返し」をいつか受けると思えてならない。

### Jaqueのこと

Page夫妻には、3人の娘がいる。一番上がJaqueであり、次の娘はすでに嫁いでおり、末娘はまだ学生である。二番目の娘は、NZにおいて過去に、「Pony Riding」（乗馬）のQueenになったほどの乗馬の名手であり、現在旅行会社に勤めている。

ところで、今、家にいるJaqueだが、20才から2年半、ヨーロッパ圏のすべてと、アメリカ、さらにシンガポールなどを1人で旅行した経験をもつ。それも、親の縁ぎに頼らず、自分のもつ秘書の資格を生かしたり、ウエイトレスをしたりしながら自らアルバイトをしつつの旅行である。「世界をまたにかけて歩く」だけでも並々ならぬことなのに、女1人、自ら働きながらの旅行とは。

図10 春のたたずまいの中のJaqueと  
寺中先生



ところが、このことは何もJaqueに限ったことではないらしい。寺中先生が聞かれたところによると、NZの若者は20才くらいにな

ると長い短かいは別に、母国のイギリスを中心に一度は海外旅行はするそうである。それも、Jaqueと同様、自分で稼ぎながらである。

事実、ファームスティ後親しく話をしたクライストチャーチの店の女の子は、来年日本に来ると言う。また、観光途中「Hallo」と声をかけた若者は「こんにちは」と答え、「どこで日本語を覚えたか」と尋ねると「昨年、浜松の日本語学校に通っていた」という。

同じ島国の日本と、NZ。しかし、NZの若者の海外旅行とそのやり方に、明日のNZの確固とした足音を聞く。

## 健康

NZで最も問題となる疾患は何であろうか。看護婦のMrs. Pageが教えてくれたところによると、精神的な病気のこと。文明社会では、どこも同じことなのだろうか。Mrs. Pageのお母さんは、今クライストチャーチで1人暮らしだそうである。一緒に暮らそうといっても、1人の方が気楽だと言っているそうだ。老人問題や精神的健康の保持の問題は、先進諸国が共通にかかえている課題のようである。

ただ、Mr. Pageが青空をあおぎながら、「カゼさえひかなきゃ、なんにも問題ないよ」と言った言葉に、NZ農村の自然も人間関係をも含めた豊かさを感じた。

なお、死亡原因では、大腸ガンが最も多く、NZは世界のトップクラスの大腸ガン発生国となっており、肉の摂取量の多さと深い関係があると言われている。

また、農業災害事故は年間約1名ぐらいの死亡があるそうで、農業人口約30万人とすれば、富山県の農災事故による死亡より若干低い死亡率とも言える。

さらに、農家の日頃罹る病気は、資料によると関節炎が最も多く、次で背痛、喉頭炎および風邪などの順である。関節炎や背痛の多いのは、実際に干草の運搬を手伝ったことで

なるほどと背けた。バック化された干草は、1ヶ20kg以上はあると思われた。私は汗だくであったがJaqueやMr. Pageは軽々と持ち上げていたが、それなりに肉体的負荷がかかっていることであろう。

図11 昼食の合間に



## KIND

旅行期間8日、そのうちファームスティはわずか2泊3日。天気もよく、Page家の人々も大変親切であったので、いいことばかりが印象に残り、現実のNZの姿をかかってに美化してしまったかもしれない。

しかし、雨が降らず農作業が大変忙しい時期の滞在であったにもかかわらず、毎日夜おそくまで話に乗ってくれ、料理も手の込んだ超一流（私にはそう思えた）のものが出された。そして、あまりの親切さに、「あなた方は旅行社から充分のお金をもらっているか」と心配の余り問いただしたところ、「1人当たり1日5,000円ぐらい」との答え。いくら物価が安いと言っても、日本ではベッド代になるかならないかである。我々が、旅行社がピンハネしているに違いないと意気まくと、Page夫妻は、とにかく滞在してもらうことが楽しんだといった表情でまったくとりあわない。

5月に電話した時、Page家の人々はみな元気であった。雄大な雲が流れる下で今日も汗を流していることだろう。機会があれば、もう一度訪れてみたい国である。

## ファームステイの後

ファームステイ後、学会に参加。会議終了後の9月14日、北島の温泉地ロトルアへ、そこで旅行団一行は2泊後、バスでNZ最大の都市オークランドへ向かわれる。

私の方は、ロトルア1泊後、ようやく捜しあてたペンパルに会うため、9月15日の朝1人でNZの主都ウエリントン経由にてワンガヌイ空港に着く。空港で会った彼女は、かなり生活に疲れている様子であったが（2年前に離婚）、お互いの子供の写真を見せながらとにかく会えたことを喜び合う。

その日は、ウエリントンにて1泊、翌日クライストチャーチに戻り、再び買い物をし（寺中先生と一緒に）その日のうちにオークランドにて旅行団一行に合流。

この間1人旅行にもなり、同行の豊田先生、越山先生には大変心配をかけてしまった。

いずれにしても、寺中先生を始め諸先生方の暖かい配慮で、この収穫多き、初の海外旅行を無事に終えることができたことを、ここに深く感謝するものです。